

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

西田幾多郎の声

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

西田幾多郎 著

西田幾多郎の声

手紙と日記が語るその人生 前篇

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は西田幾多郎の公表された手紙と日記の選集である（二分冊）。本書の底本とした最新版の「西田幾多郎全集」（岩波書店刊）は、書籍自体に「新版」と記されてはいないが、出版案内の広告では「新版 西田幾多郎全集」とうたわれている全二十四巻構成の版である。この最新版全集は新編集による全面改版の増補新訂版であり、手紙は大幅に増補されている。「収集した書簡を基本的にすべて収録する」という方針のもとに、新たに収集されたものに加えて旧版の編集方針により不採用となったものも増補されたと推察され、また旧版で部分的に秘されたか省かれたところもあらわされている。直前の旧版収録数二八五通に対し、最新版では四四九通となった（旧版は日記篇一卷、書簡篇二巻構成、最新版は日記篇二巻、書簡篇五巻構成）。本書には九九六通の手紙を採用した。そのうち最新版で加えられた手紙は一六三通である。

一、本書は「手紙と日記」という西田幾多郎自身の言葉をしてその人生を語らしめる」ことを企図したものであり、手紙と日記とを分類することなく、選んだ全てのものを日付順に配列した。

一、手紙には●の印をつけ、日記には○の印をつけて区別した。

一、手紙と日記のほかに、読解の助けとなるものとして、1. 西田が停年退官の時点で生涯を回顧した文章「或る教授の退職の辞」、2. 家族関係図、3. 主要人物紹介、4. 年譜、5. 著書目次一覧、6. 宛名索引を附録した。

一、本書では読みやすさを旨として、次のような表記を採用した。

*

一、仮名遣いは現代の仮名遣いに置き換えて表記した。

一、漢字は新漢字の標準字体で表記した。ただし、固有名詞中において今なおその者自らが旧漢字を使っている場合に限り旧漢字で表記し（例えば、慶應（大学）、文藝春秋）、慣例的に旧漢字表記が好まれることもあるに過ぎないような場合には新漢字で表記した（例えば、大灯国師）。なお、「廿・卅」は旧漢字ではないが例外的に「二十・三十」に置き換えた。

一、現今一般に漢字表記が避けられているもの、および難読と考えられる漢字などを平仮名に置き換えた。同じ漢字語でも文脈上の用法により漢字のままにした場合と平仮名に置き換えた場合がある（例えば、「御座います」は「ございます」に置き換え、「御座候」はそのままとした。現今仮名書きされるものでも、読みを一つに定め難いものはそのままにした（例えば、此方Ⅱこのほう、こちら、こなた）。

一、送り仮名が現今の感覚で読みにくい場合には適宜加減した（例えば、名く↓名づく）。送り仮名を加える場合に、活用語尾を文語形で出すか口語形で出すか（例えば、度↓たし／たい）についての判断は、候文の場合には文語形、文語形に接続している場合も文語形というように処理した。ただし西田自身の仮名書きにおいてこの区別は揺れている。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。

一、句読点を適宜加減・按排した。

一、適宜濁点を補った。

*

一、詩歌の類には右記の表記変更を避けた。

一、詩歌推敲の訂正、抹消、別案記入の再現を省いた場合がある。

凡 例

*

一、漢文調の表記を読み下し調に置き換えたものがある。例えば、「有之」を「これあり」に、「難有…」「被下…」を「ありがたく…／ありがとう…」 「下され…」などのように置き換えたものである。「奉願上候」「奉謝候」の類は常識的に「願い上げ奉り候」「謝し奉り候」と置き換えた（ただし西田は手紙の中で「奉謝し候」という表記もしている）。

一、読み仮名ルビを適宜付加した。片仮名の読み仮名ルビはもとからあるものである。

一、手紙・日記ともに、全体的に片仮名表記されているものは、原則として片仮名を平仮名に置き換えた（ただしごく少数の例外がある）。

一、省略した部分は（…）で示した。ただし、日記において冒頭の天気・気温の記述を省いたところにはこの（…）を記していない。

一、改行箇所は加減・整理した。

一、手紙本文末尾の日付は省いた。ただし、例えば「…日夜」のように他の要素を含む場合は残した。手紙本文末尾の差出人名は「西田」「西田幾多郎」の場合にはこれを省き、その他の場合は残した。

一、見出しにおいて（ ）で括られている年は、その年のものであろうと最新版全集の編集において推定されたことを示す。

一、手紙、日記本文中の太字表記は、もともと何らかのしかたで強調されていた部分である。

一、西田が書いたものそのままであることを明示するための「ママ」のルビ書きは（ ）で括って（ママ）と記した。

一、宛名として記された本名よりも号の類のほうが著名な場合には、そちらを見出しに使用した（例えば、鈴木貞太郎を鈴木大拙に）。

一、行内の割り書き註として補った翻訳註は、最新版全集のそれにならったものである。全集版にはなく本版で独自に補った翻訳註および翻訳註以外のちょっとした註釈は＊印をつけて区別し、割り書き註あるいはルビ註の形で記載した。

一、〇〇の伏字になっている部分は、全集版において伏字化されたものである。最新版全集で伏字が廃止された場合が多いが、最新版編集において手紙実物に当ることができなかったものは前の全集版の記述をそのまま踏襲する方針がとられているので、伏字もそのままになっている。前後の文脈から誰のことか明らかに推察される場合もあるが、伏字はすべてそのままに踏襲した。なお、最新版編集において手紙実物に当たっていても伏字が使用された場合もある。また、一部の手紙が最新版全集において既刊出版物からの「転載」扱いで掲載されているが、その手紙においてAあるいはBという伏字が用いられている場合がある。

一、本書は全面的に「西田幾多郎全集」中の書簡篇・日記篇に依拠するものであり、その長年の編集に費やされた従事者各位の労苦に対する敬意とその恩恵に与る幸福とは辞に尽しえないものである。

二〇一〇年十二月 書肆心水

或る教授の退職の辞

これは楽友館の給仕が話したのを誰かが書いたものらしい、しかもそれは大分以前のことであろう。

初夏の或る晩、楽友館の広間に、皓々と電灯がかがやいて、多くの人々が集った。この頃よくある停年教授の慰労会が催されるのらしい。もう暑苦しいと云ってよい頃であつたが、それでも開け放された窓のカーテンが風を孕んで、涼しげにも見えた。久しぶりにて遇った人もあるらしい。一団の人々がここかしこに卓を囲んで何だか話し合っていた。やがて宴が始まってデザート・コースに入るや、停年教授の前に坐っていた一教授が立つて、明晰なる口調で慰労の辞を述べた。停年教授はと見て居ると、彼は見掛によらぬ羞^{はにか}かみやと見えて、立って何だか謝辞らしいことを述べたが、口籠^{くろう}ってよく分らなかった。宴が終つて、誰もかれも打ち寛いだ頃、彼は前の謝辞があまりに簡単に済

まなかつたとも思ったか、又立って彼の生涯の回顧らしいことを話し始めた。

私は今日を以て私の何十年の公生涯を終ったのである。私は近頃ラムのエッセー・オブ・エリヤを取り出して、「老朽者」という一文を読んだ。そしてそれが如何にもよく私の今日の心持を言い表し居るものだとか痛く同感した。回顧すれば、私の生涯は極めて簡単なものであった。その前半は黒板を前にして坐した、その後半は黒板を後にして立った。黒板に向って一回転をなしたと云えば、それで私の伝記は尽きるのである。しかし明日ストーヴに焼べられる一本の草にも、それ相應の来歴があり、思出がなければならぬ。平凡なる私の如きものも六十年の生涯を回顧して、転た水の流と人の行末という如き感慨に堪えない。私は北国の一寒村に生れた。子供の時は村の小学校に通うて、父母の膝下で砂原の松林の中を遊び暮した。十三、四歳の時、小姉に連れられて金沢に出て、師範学校に入った。村では小学校の先生程の学者はない、私は先生の学校に入ったのである。然るに幸か不幸か私は重いチブスに罹って一年程学校を休んだ。その中、追々世の中のものも分かる様になったので、私は師範学校をやめて専門学校に入った。専門学校が第四高等中学校と改まると共に、四高の学生となったのである。四高では私にも将来の専門を決定すべき時期が来た。そして多くの青年が迷う如く私もこの問題に迷った。特に数学に入るか哲学に入るかは、私には決し難い問題であった。尊敬していた或る先生からは、数学に入る様に勧められた。哲学には論理的能力のみならず、詩人的想

或る教授の退職の辞

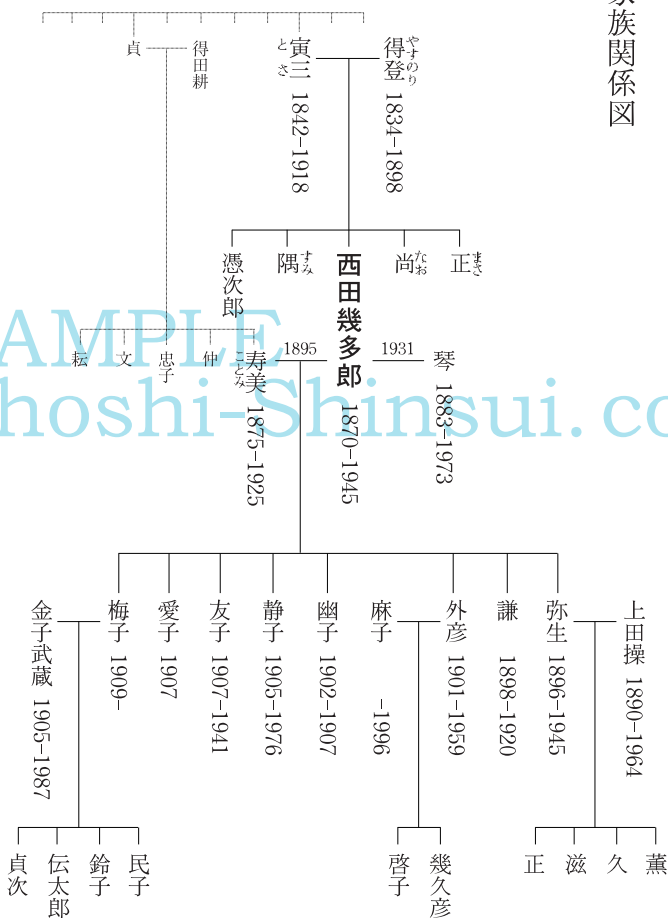
像力が必要である、そういう能力があるか否かは分らないと云われるのである。理に於てはいかにも当然である、私もそれを否定するだけの自信も有^もち得なかつた。しかしそれに關らず私は何となく乾燥無味な数学に一生を托する氣にもなれなかつた。自己の能力を疑いつつも、遂に哲学に定めてしまった。四高の学生時代というのは、私の生涯に於て最も愉快な時期であつた。青年の客氣に任せて豪放不羈、何の顧慮する所もなく振る舞うた。その結果、半途にして学校を退く様になつた。当時思う様、学問は必ずしも独学にて成し遂げられないことはあるまい、むしろ学校の羈絆を脱して自由に読書するに如くはないと。終日家居して読書した。然るに未だ一年をも経ない中に、眼を疾^やんで医師から読書を禁ぜられる様になつた。遂に又節を屈して東京に出て、文科大学の選科に入つた。當時の選科生というものは慘じめなものであつた、私は何だか人生の落伍者となつた様に感じた。学校を卒えてからすぐ田舎の中学校に行つた。それから暫く山口の高等学校に居たが、遂に四高の独語教師となつて十年の歳月を過ごした。金沢に居た十年間は私の心身共に^{きんしん}壮^{さかん}な、人生の最もよき時であつた。多少書を読み思索にも耽^たつた私には、時に研究の便宜と自由とを願わないこともなかつたが、一旦かかる境遇に置かれた私には、それ以上の境遇は一場の夢としか思えなかつた。然るに歲漸く不惑に入つた頃、如何なる風の吹き廻しにや、友人の推輓によつてこの大学に来る様になつた。来た頃は留学中の或る教授の留守居というのであつたが、遂にここに留まることとなり、烏兔忽々いつしか二十年近くの年月を過ごすに至つた。近来はしばしば、家庭の不幸に

遇い、心身共に銷磨して、成すべきことも成さず、尽すべきことも尽さなかった。今日、諸君のこの厚意に対して、心ひそかに忸怩たらざるを得ない。幼時に読んだ英語読本の中に「墓場」と題する一文があり、何の墓を見ても、よき夫、よき妻、よき子と書いてある、悪しき人々は何処に葬られて居るのであろうかと云う如きことがあったと記憶する。諸君も屍に鞭うたないと云う寛大の心を以て、すべての私の過去を容してもらいたい。

彼はこういう様なことを話して座に復した。集れる人々の中には、彼のつまらない生涯を臆面もなくくだくだと述べ立てたものに対して、嫌気を催したのもあったであろう、心ひそかに苦笑したものもあったかも知れない。しかし凹字形に並べられたテーブルに、彼を中心として暫く昔話が続けられた。その中、彼は明日遠くへ行かねばならぬと云うので、早く帰った。多くの人々は彼を玄関に見送った。彼は心地よげに街頭の闇の中に消え去った。

(昭和三年十二月)

家族関係図



主要人物註 (五十音順)

*この人物註は、主に最新版全集の「人名解説」より抜粋して作成した。
東京大学、帝国大学、東京帝国大学はいずれも東大の略称で記述した。

●岩波茂雄 岩波書店創業社主。一八八一年生、一九四六年歿。大正六年以降の西田の著作出版は岩波の書店が一手に担った。

●植田寿蔵 美学研究者。一八八六年生、一九七三年歿。明治四十四年、京大美学美術史卒。大正十一年、京大文学部助教授。大正十四年から昭和二年までヨーロッパ留学。帰国後、九大教授。昭和四年、京大文学部教授。

●逢坂元吉郎 牧師・ジャーナリスト。一八八〇年生、一九四五年歿。明治二十八年、石川県尋常中学七尾分校入学、西田に学ぶ。明治三十六年、四高卒。三々塾出身。東大法科中退。昭和四年、三々塾後輩の正力松太郎に招かれて読売新聞社に入る。

●沢瀉^{むたが}久敬 哲学研究者。一九〇四年生、一九九五年歿。昭和四年、京大哲学卒。昭和二十三年、阪大文学部教授。フランス哲学専攻。

●河合良成 実業家・政治家。一八八六年生、一九七〇年歿。明治四十年、四高卒。三々塾出身。明治四十四年、東大法科卒、農商務省を経て実業界に入る。昭和九年、帝大事件連座、無罪判決。

●木村素衛^{もくりゆう} 哲学研究者。一八九五年生、一九四六年歿。大正十二年、京大哲学卒。昭和五年、広島文理大教授。昭和八年、京大文学部助教授。昭和十五年、同教授、教育学教授法講座担当。

主要人物註

●高坂正顕 哲学者。一九〇〇年生、一九六九年歿。大正十二年、京大哲学卒。昭和十一年、東京文理大助教授。昭和十五年、京大人文研教授。翌年、同所長。

●島谷俊三 哲学者。昭和二年、京大哲学卒。静岡師範教授。

●下村寅太郎 哲学者。一九〇二年生、一九九五年歿。大正十五年、京大哲学卒。昭和十六年、東京文理大助教授。昭和二十年、同教授。

●末綱恕一 数学者。一八九八年生、一九七〇年歿。大正十一年、東大数学卒。九大助教授、東大助教授を経て、昭和十年、東大理学部教授。

●鈴木大拙 禅学研究者。一八七〇年生、一九六六年歿。本名、貞太郎。明治十五年、石川県専門学校初等中学入学。明治十九年、西田に出会う。明治二十年、四高予科第一級編入。経済的事情で中退。小学校で英語を教えたのち、明治二十四年、東京専門学校入学。翌年、東大哲学選科入学。明治二十八年、中退。明治三十年、アメリカに渡り出版社の編集員となる。明治四十一年、ヨーロッパに渡り翌年帰国。明治四十三年、学習院教授。明治四十四年、ビアトリクス・レーンと結婚。大正十年、真宗大谷大教授（昭和三十五年まで）。

●滝沢克己 神学・哲学者。一九〇九年生、一九八四年歿。昭和二年、東大法学部入学、退学。翌年、九大入学。昭和六年、九大哲学卒。昭和九年、カール・バルトのもとに留学。帰国後、山口高商教授、九大文学部教授。

●田辺寿利 社会学研究者。一八九四年生、一九六二年歿。日大専門部卒。東大社会学選科中退。デュルケムを中心とするフランス社会学専攻。

●田辺元 哲学者。一八八五年生、一九六二年歿。明治四十一年、東大哲学卒。大正二年、東北大理学部講

師。大正八年、京大文学部助教。昭和二年、同教授。西田のあとをうけて哲学講座担当。昭和二十年、退官。

●田部隆次 たなべ 英文学研究者。一八七五年生、一九五七年歿。明治二十六年、東京専門学校入学、退学、東大英文学選科入学。明治三十二年、同修了、四高講師。明治三十五年、同教授。西田らの三々塾運営に協力。明治四十年、学習院女子部へ転出。大正七年、女子学習院教授（昭和四年まで）。昭和八年、武蔵高校教授（昭和十六年まで）。

●得能文 ぶん 哲学研究者。一八六六年生、一九四五年歿。明治二十五年、東大哲学選科修了。明治二十八年、四高講師。明治三十年、西田らとともに講師嘱託を解かれる。東大講師、東京高師教授などを務めるが、昭和八年、病気のため退官。

●戸坂潤 哲学研究者。一九〇〇年生、一九四五年歿。一高を経て、大正十三年、京大哲学卒。昭和四年、大谷大教授。昭和六年、三木清辞職のあとをうけて法政大講師。昭和十三年、治安維持法違反の容疑で検挙。一旦保釈、昭和十九年、有罪確定。収監され獄死。

●西谷啓治 宗教哲学研究者。一九〇〇年生、一九九〇年歿。一高を経て、大正十三年、京大哲学卒。昭和三年、大谷大教授。昭和十年、京大文学部助教。昭和十八年、同教授、宗教学講座担当。

●原田熊雄 政治家。一八八八年生、一九四六年歿。学習院を経て、大正四年、京大法科卒。近衛文麿、木戸幸一ら、学習院から京大法科へ進んだグループの一員。学習院時代、西田に学ぶ。日銀勤務を経て、大正十三年、加藤高明内閣の首相秘書官、大正十五年、西園寺公望の秘書。大戦末期、近衛文麿らと終戦工作に従事。

●久松真一 仏教学研究著者・仏者。一八八九年生、一九八〇年歿。大正四年、京大哲学卒。臨済宗大学教授、龍谷大教授などを経て、昭和十二年、京大文学部助教。昭和二十一年、同教授、仏教学講座担当。

主要人物註

●藤岡作太郎（東圃） 国文学研究者。一八七〇年生、一九一〇年歿。明治二十三年、四高卒。明治二十七年、東大国文学卒。明治二十八年、京都真宗大谷派第一中学ならびに大学寮教授。明治三十年、三高教授。明治三十三年、東大文科助教授。喘息の持病があり虚弱。体が小さいため「豆」と綽名された。四高時代には西田、山本良吉らと我尊会、不成文会を結成。

●北条時敬 数学研究者。金沢啓明学校から、明治十四年、大学予備門卒。明治十八年、東大数学卒。石川県専門学校教諭。明治二十一年、再上京して大学院入学。明治二十四年、一高教諭。明治二十七年、山口高校教授。明治二十九年、同校長。明治三十一年、四高校長。明治三十五年、新設の広島高師校長。大正二年、東北大第二代総長。大正六年、学習院長。その後、宮中顧問官、貴族院議員。

●堀維孝 国文学・漢文学研究者。一八六八年生、一九五四年歿。明治十九年、山形県尋常中学校校卒。独学で教員免許取得。各地の小中学校の教職を経て、明治二十八年、山口県尋常中学校教諭となり北条時敬の知遇を得る。明治三十年、石川県尋常中学校教諭。明治三十一年、四高助教授。北条の意を受けて、西田とともに三々塾をつくり生徒指導。明治三十五年、北条の広島高師校長就任に伴って同助教授。翌年同教授。大正五年、学習院教授。学習院退職後、昭和六年から九年間、武蔵高校講師。

●松本文三郎 インド哲学研究者。一八六九年生、一九四四年歿。明治二十三年、四高卒。四高では西田の一つ上級。西田らと我尊会を結成。明治二十六年、東大哲学卒。一高教授などを経て、明治三十九年、京大文科大學開設とともに同教授、印度哲学史講座担当。明治四十一年、狩野亨吉の後をうけて文科大學長（大正五年まで）。同年京大学生監となった山本良吉とともに西田の京大就職に尽力。

●三宅剛一 哲学研究者。一八九五年生、一九八二年歿。大正八年、京大哲学卒。大正十三年、東北大理学部助教。昭和十八年、同法文学部助教授。昭和二十一年、同教授、近世哲学史講座、現代哲学講座担当。昭和二十九年、京大文学部教授、哲学講座担当。

●務台理作 哲学研究者。一八九〇年生、一九七四年歿。大正三年、東京高師卒、長野師範に赴任したが、翌年京大文科入学。大正十二年、大谷大教授。昭和三年、台北大文政学部教授。昭和十年、東京文理大教授。

●柳田謙十郎 哲学研究者。一八九三年生、一九八三年歿。神奈川師範卒。小学校や岡山師範などの教職を経て京大入学。大正十五年、京大倫理学卒。弘前高校教授、台北大助教授を経て、昭和十七年、大谷大教授。昭和十九年、浦和高校教授。

●山内得立 哲学研究者。一八九〇年生、一九八二年歿。大正三年、京大哲学卒。大正十年、東京商大助教授。大正十四年、同教授。昭和六年、京大文学部教授、古代中世哲学史講座、のち哲学講座担当。

●山本良吉 教育者。一八七一年生、一九四二年歿。石川県専門学校で西田を知る。明治二十年、同校が第四高等中学校となったときに西田と同級生になる。専門学校時代に鈴木大拙、藤岡作太郎らと雑誌を刊行。四高時代には西田、藤岡らと我尊会、不成文会を結成。明治二十二年、学校当局の教育方針に反抗して退学。石川県共立尋常中学校で英語を教えたのち、明治二十五年、東大政治学選科入学、のち文科（哲学）に転じ、明治二十八年、選科修了。京都府立尋常中学校、静岡県尋常中学校、京都府立二中などの教職を経て、明治四十一年、北条時敬の仲介で京大学生監となる。文科大学長松本文三郎とともに西田の京大就職に尽力。大正七年、北条が院長をつとめる学習院教授に転じるが、大正九年の北条退職（内部対立の引責辞任）に伴い学習院を去る。一年間欧米視察ののち、大正十一年、一木喜徳郎が校長を務める新設の武蔵高校教頭となり、昭和十一年、同第三代校長。

●和辻哲郎 倫理学研究者。一八八九年生、一九六〇年歿。明治四十二年、東大文科入学。大正九年、東洋大教授。大正十四年、京大文学部講師、ほどなく助教授。昭和六年、同教授。昭和九年、東大文学部教授、倫理学講座担当。

年

譜

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

●明治三年（一八七〇年） 0歳

五月十九日、父得登（当時三十六歳）、母寅三（当時二十八歳）の長男として加賀国河北郡森村（のち金津村、宇ノ気村、現在の石川県かほく市森）に誕生。戸籍の生年月日は明治元年八月十日だが、これは石川県師範学校早期入学のために父が手を加えたものと推測されている。

●明治八年（一八七五年） 5歳

四月、長楽寺内の森小学校入学。

●明治十二年（一八七九年） 9歳

森にある西田家に小学校が移り新化小学校と改称されそこで学ぶ。校長得登。

●明治十五年（一八八二年） 12歳

四月、新化小学校高等科卒業。

●明治十六年（一八八三年） 13歳

七月、石川県師範学校入学。姉尚、弟憑次郎と金沢市長土塀二番丁二に移る。

秋、尚とともにチフスに罹り学校を長期欠席。

十一月二十八日、次姉尚死去（チフス）。

母も金沢に移る。

●明治十七年（一八八四年） 14歳

二月、石川県師範学校予備科卒業。

年 譜

八月、本科六級修了。
十月、病氣療養のため石川県師範学校中退。

●明治十九年（一八八六年） 16歳

三月より石川県専門学校教諭北条時敬^{ときこう}について学びはじめる。
九月、石川県専門学校附属初等中学校第二級（第三学年）補欠入学。鈴木貞太郎（大拙）、藤岡作太郎（東圃）、金田（山本）良吉と出会う。

●明治二十年（一八八七年） 17歳

二月、初等中学校第二級修了。
七月、初等中学校卒業。
九月、石川県専門学校が第四高等中学校となり予科第一級（第三学年）編入学。
十一月、北条時敬宅に寄寓し数学を学ぶ。

●明治二十一年（一八八八年） 18歳

四月、北条時敬、第四高等中学校教諭となる。
七月、第四高等中学校予科卒業。
八月、上京。
九月、第四高等中学校第一部文科第一年生となる。鈴木大拙、家計の都合により第四高等中学校を中退し、小学校で英語を教える。北条時敬（帝国大学大学院入学のため第四高等中学校辞職）。

●明治二十二年（一八八九年） 19歳

二月頃、金田（山本）良吉、第四高等学校中退。

五月、藤岡作太郎、金田（山本）良吉、松本文三郎らと「我尊会」を結成し文芸活動。

翌年七月まで続く。

七月、行状点百点中八点にて第一学年落第。

九月、一部文科から二部理科へ転科（第一学年）。

●明治二十三年（一八九〇年） 20歳

春、第四高等学校を中退。

九月、金田（山本）良吉、藤岡作太郎らと

「不成文会」を結成し文芸活動。翌年五月まで続く。

●明治二十四年（一八九一年） 21歳

二月頃、読書過多のため眼に障害を生じる。

五月、鈴木大拙、上京。翌月、東京専門学校入学。

六月、独学の方針を捨て、帝国大学文科大学選科入学のため上京。

九月、帝国大学文科大学哲学科選科入学。井上哲次郎、元良勇次郎、中島力造、ブッセらに学ぶ。

●明治二十五年（一八九二年） 22歳



明治23年 我尊会記念写真

年 譜

九月、母、弟（陸軍士官学校入学希望）と本郷区に住む。のち牛込区、小石川区に移る。
この年、父得登、田畑、宅地、山林等売却し、金沢で米穀取引所の仲買人となる。鈴木大拙、帝国大学文科大学哲学科選科入学。金田（山本）良吉、帝国大学法科大学政治学科選科入学（のち文科大学哲学科選科に転科）。

●明治二十七年（一八九四年） 24歳

七月、帝国大学文科大学哲学科選科修了。金沢市備中町七六、得田耕方（母の妹貞の婚家）に寄寓。
八月、北条時敬、山口高等学校教授となる。

●明治二十八年（一八九五年） 25歳

四月、石川県尋常中学校七尾分校主任となる。七尾町湊町二丁目大乘寺の庫裏に住む。のち七尾町少将町大味久五郎方に移る。

五月、従兄妹の寿美と結婚（得田耕長女、明治八年三月二十一日生、西田の母寅三の妹貞の子）。

十月、藤岡作太郎、真宗大学寮教授となる。

十一月、父得登の米穀取引「西田商店」廃業。

この年、山本良吉、帝国大学文科大学哲学科選科を修了し、京都府立尋常中学校教諭となる。

●明治二十九年（一八九六年） 26歳

三月二十五日、長女弥生誕生。

四月、第四高等学校講師嘱託となる。得田方に寄寓、のち市内小将町中丁大味方に移る。

六月、北条時敬、山口高等学校校長に昇任。

十二月、父得登が菩提寺の長樂寺住職に宛て、「不孝ノ長男幾多郎外三名之子供並ニ不貞操不人情ノ

妻とさ」の参拝焼香を禁じて欲しいとの「遺言御依頼書」を書き送る。

●明治三十年（一八九七年） 27歳

二月、鈴木大拙、アメリカへ出発。

五月、寿美、長女弥生を連れて家を去り、離婚に至る。得能文らとともに第四高等学校講師嘱託を解かれる。

六月、京都帝国大学創設。伴って帝国大学が東京帝国大学に改称される。

六月、八月、京都妙心寺参禅、虎関宗補に会う。

九月、山口高等学校教務嘱託となる。山口県吉敷郡山口町米屋町十阿部方、同十五松本方、相良小路上田方、下堅小路四十五岡部方に下宿。藤岡作太郎、第三高等学校教授となる。

十二月、京都妙心寺参禅。

●明治三十一年（一八九八年） 28歳

一月、京都妙心寺参禅。

二月、北条時敬の第四高等学校校長転任が決まる。

六月上旬、長男謙誕生。

七月、八月、京都妙心寺参禅。

十月九日、金沢市で父得登死す（肺炎）。（九月下旬金沢帰省、十月中旬山口帰還）。

十二月、京都妙心寺参禅。

●明治三十二年（一八九九年） 29歳

一月、京都妙心寺参禅。

年 譜

二月、寿美と和解。
三月、山口高等学校教授となる。
七月、第四高等学校教授となる。
八月、京都妙心寺参禅。金沢市百姓町七十一に居住。
九月、四高の同僚に、田部隆次（英文学）、堀維孝（国文学・漢文学）、三竹欽五郎（ドイツ語）。

●明治三十三年（一九〇〇年） 30歳

九月、藤岡作太郎、東京帝国大学文科大学助教授となる。

十一月、北条時敬の勧めもあり、堀維孝、三竹欽五郎とともに三々塾を作り生徒指導を始める。

●明治三十四年（一九〇一年） 31歳

新年を洗心庵で迎える。

二月四日、次男外彦誕生。金沢市中本多町三番丁に転居。

三月十日、雪門玄松より居士号「寸心」を与えられる。

六月、金沢市塩川町九に転居。弟憑次郎結婚。

九月、第四高等学校時習寮の舎監を兼任。

●明治三十五年（一九〇二年） 32歳



明治40年 三々塾関係者

新年を洗心庵で迎える。

五月、寮の舎監辞任を願う。

七月、八月、和歌山、奈良、京都へ。

十二月二十日頃、次女幽子誕生。

この年、北条時敬、広島高等師範学校長となる。北条の要請により堀維孝も同校へ移る。

●明治三十六年（一九〇三年） 33歳

新年を洗心庵で迎える。

四月、金沢市長土塀四番丁三に転居。

七月、八月、京都大徳寺広州宗沢に参禅。「無字」の公案透過。

●明治三十七年（一九〇四年） 34歳

六月、弟憑次郎、日露戦争出征。

八月二十四日、弟憑次郎、旅順総攻撃で戦死。

●明治三十八年（一九〇五年） 35歳

新年を洗心庵で迎える。

一月、弟憑次郎の遺族を引き取る。

五月、弟憑次郎の遺骨帰る。

七月、富山県国泰寺瑞雲義寛に参禅。

十月十四日、三女静子誕生。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

年 譜

●明治三十九年（一九〇六年） 36歳

新年を洗心庵で迎える。

七月、金沢市欠原町長谷院に転居。

八月、金沢市下本多町三番丁三に転居。

九月、京都帝国大学文科大学開設。

この年度の「倫理」（前半）の講義草稿が「實在論」という表題で印刷される。

●明治四十年（一九〇七年） 37歳

一月十一日、次女幽子死去（気管支炎）。

三月、乾性肋膜炎。「實在に就いて」（『哲学雑誌』）。北条時敬が東京帝国大学総長浜尾新を訪問し西

田の東京帝国大学採用を依頼。

四月、上京、旧師井上哲次郎、元良勇次郎を訪問。この年度の「倫理」（後半）の講義草稿が「倫理

学」という表題で印刷される。

五月四日、四女友子、五女愛子誕生。

六月三日、五女愛子死去。

七月、病後保養のため石川県江沼郡橋立に転地。

九月、「實在論」と「倫理学」とをあわせた「西田氏實在論及倫理学」を印刷。

この年、田部隆次、学習院女子部に転出。

●明治四十一年（一九〇八年） 38歳

三月より「倫理学説」（『東亜之光』）連載。

四月、インフルエンザ、肋膜炎で六月まで不調。

六月、山本良吉、京都帝国大学学生監となる。
七月、病後保養のため海辺（石川県上金石町湊町）に転地。
八月、「純粹経験と思惟、意志、及び知的直観」（『哲学雑誌』）。金沢市塩川町十三に転居。
十月、宗教論（「宗教に就て」）に着手。

●明治四十二年（一九〇九年） 39歳

三月十四日、六女梅子誕生。
三月、鈴木大拙、イギリスを経て帰国。
四月、京都で大拙に会う。東京へ。井上哲次郎、元良勇次郎訪問。
五月、「宗教に就て」（『丁酉倫理会倫理講演集』）。
七月、学習院教授の辞令が出る。「神と世界」（『丁酉倫理会倫理講演集』）。
八月、東京府西大久保三八二に転居。鈴木大拙、学習院英語科講師となる。
九月、学習院のドイツ語主任となる。
十月、日本大学講師となる。
十二月、講演「實在に就いて」（哲学会）。

●明治四十三年（一九一〇年） 40歳

二月三日、藤岡作太郎死去（心臓麻痺）。
二月、「純粹経験相互の關係及連絡に付いて」（『哲学雑誌』）。
四月、豊山大学講師となる。鈴木大拙、学習院英語科教授となる。
四月二十二日、京都帝国大学への採用が教授会にて決定したとの連絡を文科大学長の松本文三郎および山本良吉から受ける。

年 譜

八月、京都市吉田町字近衛二十三に転居。宇ノ気村に帰省、長楽寺にて法事。
八月三十一日、京都帝国大学文科大学助教授の辞令が出る。
九月二十二日、「哲学概論」、二十三日「倫理学（特殊）」の講義を開始。
十一月、「ベルグソンの哲学的方法論」（『芸文』）。講演「自然法と道徳法」（哲学倫理学研究会秋季大会）。

十一月二十九日、寿美入院、男児流産。
十二月、広島に北条時敬を訪ね、九州に遊ぶ。鹿児島教育会の依頼により講演など。

●明治四十四年（一九一一年） 41歳

一月、『善の研究』（弘道館）。「トルストイについて」（『芸文』）。
四月、「愚禿親鸞」（『宗祖観』）。
八月、九月「認識論に於ける純論理派の主張に就て」（『芸文』）。
九月、この年度担当科目、西洋哲学普通講義「哲学概論」、倫理学特殊講義「法則」、倫理学講読 Dewey and Tufts, Ethics, 宗教学演習 Hoffding, Religionsphilosophie.
十月、真宗大谷大学講師（哲学概論、倫理）となる。
十一月、「ベルグソンの純粹持続」（『教育学术界』臨時増刊）。

●明治四十五年・大正元年（一九一二年） 42歳

一月、京都高等工芸学校講師となる。
二月、「法則」（『哲学雑誌』）。
三月、講演「宗教的意識」（京都帝国大学宗教学会）。
三月、四月、金沢帰省。

五月、講演「理解と直観」（哲学倫理学会）。

九月、この年度担当科目、西洋哲学普通講義「哲学概論」、倫理学特殊講義「法則」、倫理学講義「Aristotle's Ethics、宗教学演習 Schleiermacher、[論理の理解と数理の理解]」（『芸文』）。

十月、「認識論者としてのアンリ・ポアンカレ」（『芸文』）。「高橋（里美）文学士の拙著『善の研究』に対する批評に答ふ」（『哲学雑誌』）。

十二月、京都府田中村字中河原八に転居（のちに上柳町二十九番地に表示変更）。

この年、植田寿蔵、久松真一、中川（山内）得立、京大入学。

●大正二年（一九一三年） 43歳

四月、長女弥生、女子高等師範に入学、付き添って上京。田辺元にはじめて会う。講演「歴史と自然科学」（哲学会）。帰途金沢帰省、病気の母を見舞う。

五月、北条時敬、東北帝国大学総長となる。講演「精神と肉体との関係」（哲学倫理学会）。

六月、講演「知識と宗教」（京都大学基督教青年会会館）。

八月、京都帝国大学文科大学教授となる（宗教学講座担当）。金沢帰省。

九月、この年度担当科目、宗教学普通講義、心理学普通講義、宗教学演習「Kant, Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft. [自覚に於ける直観と反省、一、二、三]」（『芸文』）。「自然科学と歴史学」（『哲学雑誌』）。講演「宗教的真理」（同志社）。

十一月、「自覚に於ける直観と反省、四、五、六」（『芸文』）。

十二月、文学博士の学位を受ける。金沢帰省。

●大正三年（一九一四年） 44歳

三月、「自覚に於ける直観と反省、七、八」（『芸文』）。

年 譜

●大正四年（一九一五年） 45歳

五月、「田部隆次君著小泉八雲伝の序」（『芸文』）。
 八月、京都帝国大学文科大学教授（哲学哲学史第一講座担当）となる（桑木厳翼東大転任）。「自覚に於ける直観と反省、九、十」（『芸文』）。講演「宗教ニ就テ」（京都帝国大学第五回講演会）。
 九月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、心理学普通講義、哲学特殊講義「現今ノ独逸哲学」、哲学演習・心理学演習 Begson, Gedächtnis und Materie。
 十一月「自覚に於ける直観と反省、十一、十二、十三」（『芸文』）。
 一月、「自覚に於ける直観と反省、十四、十五」（『芸文』）。
 三月、「自覚に於ける直観と反省、十六、十七」（『芸文』）。『思索と体験』（千章館）。
 五月、講演「新理想主義」（京都哲学会春季大会）。
 六月、「自覚に於ける直観と反省、十八、十九、二十」（『芸文』）。
 八月四日、雪門玄松死去。金沢帰省。



大正3年 西田の子供たち

九月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、心理学普通講義、哲学特殊講義（一学期は「ボ
ルツァノ及ブレントノよりフツセル迄」、二、三学期は「ヘーゲル論理学」、哲学演習「Kant, Kritik der
reinen Vernunft」。

十二月、「自覚に於ける直観と反省、二十一、二十二、二十三」(『芸文』)。
この年、務台理作、京大入学。

●大正五年（一九一六年） 46歳

一月、「自覚に於ける直観と反省、二十四、二十五、二十六」(『芸文』)。「雑感」(『太陽』)。「心の内
と外」(『無尽灯』)。

三月、「自覚に於ける直観と反省、二十七、二十八、二十九」(『芸文』)。

四月、『哲学研究』創刊。「現代の哲学」(『哲学研究』)。

八月「ユーヘンの純粹意識」(『芸文』)。金沢帰省。講演「現今の理想主義」(諏訪教育会)、「現代哲
学に於ける科学的真理の概念」(小泉上田教育会)、「現今の唯心論」(長野市教育会)。

九月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「ヘーゲルの論理学」、哲学演習
Fichte, Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre。

秋、連続講演「現代に於ける理想主義の哲学」(京都帝国大学学生課)。

十月、「自覚に於ける直観と反省、三十、三十一、三十二」(『哲学研究』)。

十一月「自覚に於ける直観と反省、三十三、三十四、三十五、三十六」(『哲学研究』)。

十二月、「自覚に於ける直観と反省、三十七、三十八」(『哲学研究』)。

この年、三宅剛一、京大入学。

●大正六年（一九一七年） 47歳

年 譜

●大正七年（一九一八年） 48歳

- 一月、「自覚に於ける直観と反省、三十九」（『哲学研究』）。
 - 二月、「自覚に於ける直観と反省、四十、四十一」（『哲学研究』）。
 - 三月、長女弥生、同志社に就職。
 - 四月、「自覚に於ける直観と反省、四十二」（『哲学研究』）。講演「種々の世界」（哲学会公開講演会）。肋膜炎。
 - 五月、「自覚に於ける直観と反省、四十三、四十四」（『哲学研究』）『現代に於ける理想主義の哲学』（弘道館）。「ロツツエの形而上学」（京都哲学会編『ロツツエ』）。
 - 六月、「種々の世界」（『哲学雑誌』）。一高生三木清来訪。
 - 七月、金沢帰省。
 - 八月、福井県小浜の海浜で保養。長男謙、三高入学。北条時敬、学習院長となる。
 - 九月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「直観と反省」、哲学演習 Leibniz, Discourse on Metaphysics (tr. by Montgomery)。
 - 十月、『自覚に於ける直観と反省』（岩波書店）。「日本的といふことに就て」（『思潮』）。
- この年、波多野精一、京都帝国大学文学部教授となる（宗教学講座担当）。三木清、京大入学。
- 一月、「意識とは何を意味するか」（『哲学研究』）。「ライブニッツの本体論的証明」（『芸文』）。
 - 三月、山本良吉、北条時敬に招かれ学習院教授となる。「象徴の真意義」（『思潮』）。
 - 四月、母病氣のため金沢帰省。山本良吉の仲介で長女弥生と上田操の結婚話が進む。
 - 六月、「感覚」（『哲学研究』）。「アウグスチヌスの三位一体論」（『智山学報』）。
 - 七月、母重病のため金沢帰省。「感情」（『哲学研究』）。
 - 八月、一旦帰洛、更に金沢帰省。

九月三日、母寅三死去。「意志」(『芸文』)。この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「現代の哲学」、哲学演習 Spinoza, Ethica.

●大正八年(一九一九年) 49歳

一月、「芸術の対象界」(『制作』)。
二月、三月「経験内容の種々なる連続」(『哲学研究』)。
四月、「意志実現の場所」(『芸文』)。
五月、講演「意識の対象」(京都哲学会春期公開講演会)。
五月、六月「意志の内容」(『哲学研究』)。
六月、長女弥生、上田操と結婚。「関係に就いて」(『芸文』)。
七月、次男外彦、三高合格。
八月、田辺元、京都帝国大学文学部助教となる。
九月、「意識の明暗に就いて」(『哲学研究』)。この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「ヘーゲル論理学」、哲学演習 Bergson, L'Évolution Créatrice.
九月十四日、妻寿美、脳出血で倒れ病床につく。
十月、講演「Coincidentia oppositorumと愛」(真宗大谷大学)。
十二月、講演「宗教の立場」(仏教大学学術講演会)。

●大正九年(一九二〇年) 50歳

一月、「意識の問題」(岩波書店)。
三月、四月「美の本質」(『哲学研究』)。
四月、上京。三高三年生の長男謙、腹膜炎で入院。

年 譜

六月十一日、長男謙死去（心臓内膜炎）。

七月、長男謙の葬儀香典により『カント全集』『フイヒテ全集』ほかを購入し三高図書館に寄贈。

九月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「ヘーゲル論理学」、哲学演習 Hegel, Wissenschaft der Logik.

十月、「マックス・クリンゲルの「絵画と線画」の中から」（『芸文』）。

この年、木村素衛、高坂正顕、京大入学。

●大正十年（一九二一年） 51歳

一月、一高生戸坂潤来訪。

三月、「再版の序」を附して岩波書店版『善の研究』刊行。鈴木大拙、真宗大谷大学教授となる。

四月、「感情の内容と意志の内容」（『哲学研究』）。この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「哲学概論補遺、倫理学の根本問題」、哲学演習 Hegel, Logik (in der Enzyklopädie); Schelling, Über das Wesen der menschlichen Freiheit.

五月、三女静子、この頃より肺病のため発熱を繰り返す。

九月、「真善美の合一点」（『哲学研究』）。「学者としてのラッセル」（『改造』）。

十一月、「反省的判断の対象界」（『芸文』）。

この年、西谷啓治、戸坂潤、京大入学。

●大正十一年（一九二二年） 52歳

一月、山本良吉、武蔵高校教頭となる。

四月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「ヘーゲルの論理学」、哲学演習 Hegel, Phänomenologie des Geistes, 「社会と個人」（『哲学研究』）。娘らの家庭教師および家事担当と

して上野麻子来る。

五月、四女友子、六女梅子チフスで入院。

八月、講演「認識論」（京都帝国大学講演会）。

九月、京都市左京区田中飛鳥井町三十二に転居。「行為的主観」「美と善」（『哲学研究』）。「意志と推論式」（『思想』）。「私の主意主義の意味」（『改造』）。

九月、十月「作用の意識」（『芸文』）。

十月、十一月「エックハルトの神秘説と一燈園生活」（『光』）。

十一月「ボルツァーノの自伝」（『哲学研究』）。

この年、田辺元、ドイツ留学、フライブルクにてフッサールに就く。三木清、ドイツ留学。

●大正十二年（一九二三年） 53歳

一月、講演「カント倫理学」（京都府立教育会館）。

二月、「法と道徳」（『哲学研究』）。「真と美」（『改造』）。

三月、「真と善」（『思想』）。

四月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「意識の問題」、哲学演習Husserl, Ideen; Lotze, Metaphysik.

五月、上野麻子に代えて台北第一高女で教えていた物井花に娘らの世話を依頼。

七月、『芸術と道徳』（岩波書店）。

八月、「ケーベル先生の追懐」（『思想』）。

九月、三女静子、四女友子肺炎。「直接に与えられるもの」（『哲学研究』）。

十一月、「直観と意志」（『講座』）。講演「理念の因果律と自然の因果律」（京都哲学会秋季公開講演会）。この年、下村寅太郎、京大入学。

年 譜

●大正十三年（一九二四年） 54歳

一月、「物理現象の背後にあるもの」（『思想』）。講演「フィヒテの哲学」（京都府立教育会館）。
三月、九月、十月、「内部知覚について」（『哲学研究』）。
四月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学特殊講義「アリストートルの形而上学」、
哲学演習 *Lotze, Metaphysik*（前年度の続）、*Hegel, Phänomenologie des Geistes*。
六月、次男外彦、上野麻子と結婚（媒酌人田辺元夫妻）。

●大正十四年（一九二五年） 55歳

一月、上京。岩波茂雄らと湯河原、熱海に遊ぶ。
一月二十三日、妻寿美死去。
三月、「表現作用」（『思想』）。和辻哲郎、京都帝国大学文学部講師となる。
四月、この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学演習 *Hegel, Phänomenologie des Geistes*、社



西田寿美（肖像画）

会学演習 *Weber, Gesamte Aufsätze*。
八月、金沢婦省、寿美納骨。講演「コーヘンの哲学」（長野県平穂小学校）。田
辺元、腸閉塞のため入院し手術を受ける。
十月、「働くもの」（『哲学研究』）。
この年、高山岩男、京大入学。

●大正十五年・昭和元年（一九二六年） 56歳
四月、この年度担当科目、心理学普通講義、哲学特殊講義・西洋哲学史特殊講義「宗教の哲学的基
礎」、哲学演習 *Aristotle, Metaphysics*。

五月、六月、上京。

六月、「場所」(『哲学研究』)。講演「意識の問題」(哲学会)。日光に遊ぶ。

八月、三女静子、静養のため田辺元の鎌倉の実家で世話になる。

この年、務台理作留学(ハイデルベルク、フライブルク)。

●昭和二年(一九二七年) 57歳

一月、講演「プラトンの哲学」(京都府立教育会館)。

四月、「左右田博士に答ふ」(『哲学研究』)。この年度担当科目、哲学普通講義「哲学概論」、哲学演習

Aristotele, Metaphysics; Aristoteles, Über die Seele. 社会学演習 Hegel, Grundrissen der Philosophie des Rechts.

六月、帝国学士院会員となる。講演「犬儒学派エピクテタスの思想について」(大谷大学)。

八月、九月、「知るもの」(『思想』)。

九月、上京、文部省の会議に出席。

十月、「働くものから見るものへ」(岩波書店)。「左右田博士を悼む」(『思想』)。

十二月、上京、文部省の会議に出席。

この年、三木清、法政大学教授となる。下程勇吉、京大入学。

●昭和三年(一九二八年) 58歳

二月、京都帝国大学哲学概論の最終講義。務台理作、ドイツ留学から帰る。

四月、六女梅子、東京女子大学入学。「所謂認識対象界の論理的構造」(『哲学研究』)。「述語的論理主

義」(『思想』)。この年度担当科目、哲学特殊講義「哲学の究極的問題解決の一企図」。

五月、「希臘哲学に於ける「有るもの」」(岩波講座 世界思潮)。

六月、特殊講義終了、京都帝国大学での全講義を終える。上京、鎌倉、鶴沼へ。

年 譜

七月、「自己自身を見るものの於てある場所と意識の場所」(『哲学研究』)。
八月、免官の辞令出る。退官、謝恩、還暦祝賀記念事業等の一切を固辞。
九月、「アウグスチヌスの自覚」(『岩波講座 世界思潮』)。
十月、孫幾久彦誕生(次男外彦・麻子夫妻長男)。「叡知の世界」(『哲学研究』)。
十二月、初めて鎌倉で冬を過ごす(鎌倉町乱橋材木座三六八)。

●昭和四年(一九二九年) 59歳

一月、三女静子、結核の診断。「直覚的知識」(『哲学研究』)。
二月、京都帝国大学名誉教授となる。
三月、上京。講演「カントとフッセル」(東京帝国大学文学部哲学科談話会)。
四月、「或教授の退職の辞」(『思想』)。次男外彦、甲南高等学校赴任(物理学教師)のため、兵庫県武庫郡住吉村に転居。
四月、五月、「自覚的一般者に於てあるもの及それとその背後にあるものとの関係」(『思想』)。
四月二十七日、北条時敬死去。
五月、「私の判断的一般者といふもの」(『哲学雑誌』)。「鎌倉の歌」(『思想』)。
九月、十月、「一般者の自己限定」(『思想』)。
十月、「一般者の自己限定と自覚」(『哲学研究』)。「北条先生に始めて教を受けた頃」(『尚志』)。
十一月、上京。講演「哲学学生としての態度」(武蔵高校)。岩波茂雄と日光に遊ぶ。
十一月、十二月「自覚の限定から見た一般者の限定」(『思想』)。

●昭和五年(一九三〇年) 60歳

一月、『一般者の自覚的体系』(岩波書店)。

二月、隠居届を出す。

五月、田辺元が『哲学研究』第一七〇号に論文「西田先生の教を仰ぐ」を発表して西田の思想を批判。「書の美」（『徳雲』）。上京、山内得立と箱根に遊ぶ。

七月、八月、「表現的自己の自己限定」（『哲学研究』）。

七月下旬から九月上旬まで、鈴木大拙の世話により鎌倉円覚寺山内の黄梅院、如意楽々庵で過ごす。

九月、「場所の自己限定としての意識作用」（『思想』）。

十月、四女友子、小林全鼎と結婚（媒酌人鈴木大拙、翌年九月離婚）。静子と二人暮しに。

●昭和六年（一九三一年）61歳

一月、二月、四回連続講義「無の自覚より一般者の限定」（京都哲学会）。

二月、三月、「私の絶対無の自覚的限定といふもの」（『思想』）。

五月、「私の立場から見たヘーゲルの弁証法」（『百年忌記念 ヘーゲルとヘーゲル主義』）。

六月、広島へ。広島文理科大学で「場所の論理」について講義。

七月、「永遠の今の自己限定」（『哲学研究』）。上京。山田琴と面会予定であったが山田が病気で会えず。九月上旬まで円覚寺滞在。

八月、六女梅子、肋膜炎のため湘南サナトリウムに入院。

九月七日、稲村ヶ崎音無川にある女子英学塾津田氏別荘で山田琴に初めて会う。

十一月、「歴史」（『岩波講座 哲学』）。

十二月、上京。山田琴と再婚（明治十六年生、四十八歳。クリスチャン）。

梅子、湘南サナトリウム退院。

この年、和辻哲郎、京都帝国大学文学部教授となる。



西田琴（昭和18年頃）

年 譜

●昭和七年（一九三二年） 62歳

一月、二月、連続講演「生と実在と論理」（京都哲学会）。
二月、三月、「自愛と他愛及び弁証法」（『哲学研究』）。
四月、鎌倉町扇ヶ谷要山四三五に家を借りて十一月まで滞在。
五月、「自由意志」（『思想』）。「ゲーテの背景」（『ゲーテ年鑑』）。
六月、講演「時」の論理的構造」（法政大学）。
六月、「西田博士に聴く座談会——宗教・哲学・文化の諸問題について」『読売新聞』連載（逢坂元吉
郎司会、三木清、宮本正尊、熊野義孝ら）。
七月、「第二回座談会 西田博士に聴く——哲学と宗教と文化の結び付に就て」『読売新聞』連載（逢
坂元吉郎司会、三木清、石原純、熊野義孝ら）。
七月、九月、「私と汝」（『岩波講座 哲学』）。
九月、講演「実在の根柢としての人格概念」（長野市信濃教育会館）。講演「人格について」（丁酉倫
理会）。

十月、「生の哲学について」（『理想』）。

十月三十日、六女梅子、金子武蔵と結婚。

十二月、『無の自覚的限定』（岩波書店）。

●昭和八年（一九三三年） 63歳

一月、談話「実在の認定について——私の見てゐる其形と場所」『読売新聞』連載。
一月、二月、京都帝国大学で連続講義。
二月、「形而上学序論」（『岩波講座 哲学』）。

●昭和九年（一九三四年） 64歳

三月、「哲学と教育」（『岩波講座 教育科学』）。

四月、「知識の客観性」（『改造』）。

五月、連続講演「個人と社会」（京都帝国大学学生課主催金曜講義）。談話「文化擁護の二問題——文化暴圧の波動」（『読売新聞』掲載）。

七月、援助を受け鎌倉に家を入手（極楽寺姥ヶ谷五四七）、十月まで滞在。

九月、談話「創造の世界」（『読売新聞』掲載）。

十月、「数学者アーベル」（『東京朝日新聞』連載）。

十一月、講演（五回）「現実の世界の論理的構造」（大谷大学）。

十二月、「哲学の根本問題（行為の世界）」（岩波書店）。談話「京都に水と哲人あり——西田幾多郎氏との問答」（『読売新聞』掲載）。

この年、九鬼周造、京都帝国大学文学部助教授となる。

一月、講演「行為の世界」（京都府立教育会館）。

一月、二月、三月「現実の世界の論理的構造」（『思想』）。

二月、講演「現実の世界の論理的構造」（日本神学校）。

六月、七月、八月、「弁証法的 一般者としての世界」（『哲学研究』）。

九月、「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」（『文学』）。

十月、「哲学の根本問題 統編（弁証法的世界）」（岩波書店）。講演「私の哲学の立場と方法」（東京文理科大学）。

十一月、講演「T・S・エリオットと伝統主義」（日本英文学会）。

この年、和辻哲郎、東京帝国大学文学部教授となる（倫理学講座担当）。

年 譜

●昭和十年（一九三五年） 65歳

一月、講演「現実の世界の論理的構造」（京都府立教育会館）。

一月、二月、三月、「世界の自己同一と連続」（『思想』）。

五月、「伝統主義について」（『英文学研究』）。

六月、講演「表現作用」（京都帝国大学美学会）。

七月、「私の「人格の世界」について」（『信濃教育』）。

七月、八月、九月、「行為的直観の立場」（『思想』）。

八月、三女静子、二科展当選。

九月、仙台へ。

十月、三木清との対談「日本文化の特質——西田幾多郎博士との一問一答（一一六）」『読売新聞』連載。

十二月、『哲学論文集 第一——哲学体系への企図』（岩波書店）。教学刷新評議会（文部大臣の諮問機関として新設）出席。

この年、西谷啓治、京都帝国大学文学部助教授となる。

（西洋近世哲学史講座担当）。九鬼周造、京都帝国大学文学部教授となる。

（西洋近世哲学史講座担当）。

●昭和十一年（一九三六年） 66歳

七月、八月、九月、「論理と生命」（『思想』）。

八月、三女静子、二科展当選。

九月、三木清との対談「ヒューマニズムの現代的意義——西田幾多郎博士に訊く（一一五）」『読売新聞』連載。

この年、山本良吉、武蔵高等学校第三代校長となる。

●昭和十二年（一九三七年） 67歳

一月、「フランス哲学についての感想」（『思想』）。

三月、四月、五月、「実践と対象認識——歴史的世界に於ての認識の立場」（『哲学研究』）。

五月、『統思索と体験』（岩波書店）。

七月、「種の生成発展の問題」（『思想』）。

八月、「行為的直観」（『思想』）。文部省の役人が教当局参与就任の件で来訪するが、断る（二度）。

九月、次男外彦召集される。講演「歴史的身体」（長野市女子専門学校）。

十月、講演「学問的方法」（日比谷公会堂 日本諸学振興委員会哲学公開講演会）。文部省の役人が教当局参与就任の件で来訪、田辺元、和辻哲郎の就任を条件に引き受ける。

十一月、『哲学論文集 第二』（岩波書店）。

この年、西谷啓治、ドイツ留学、フライブルクにてハイデガーに就く。

●昭和十三年（一九三八年） 68歳

三月、「人間的存在」（『思想』）。講演「西洋哲学から見た東洋哲学の特徴——国家哲学は考えられるか」（昭和研究会内世界政策研究会）。

四月、五月、連続講演「日本文化の問題」（京都帝国大学学生課主催）。

五月、「学問的方法」（文部省教当局編纂『教学叢書』）。

八月、文部大臣荒木貞夫に会い、帝国大学総長の任免権の問題について意見する。

八月、九月、「歴史的世界に於ての個物の立場」（『思想』）。

十月、「言語」（『国語国文』）。金沢帰省、講演「日本文化ノ問題」（第四高等学校）。

十一月、『日本文化の問題』（京大学生課叢書第四編）。

この年、高山岩男、京都帝国大学文学部助教となる。

年 譜

●昭和十四年（一九三九年） 69歳

三月、「絶対矛盾的自己同一」（『思想』）。座談会「西田幾多郎を囲む座談会」（三木清、林達夫、谷川徹三、佐藤信衛）『文藝春秋』掲載。

五月、大江能楽堂で能を鑑賞。

六月十三日、長姉正死去。（『経験科学』（『思想』））

八月、「経験科学」（『思想』）。

十月、原田熊雄宅で近衛文麿、木戸幸二らと会う。

十一月、『哲学論文集 第三』（岩波書店）。文部省教学局参与の辞職願送付。

十二月、『哲学の基礎問題』（信濃哲学会での講演七篇収録、信濃哲学会、非売品）。

●昭和十五年（一九四〇年） 70歳

一月、談話「創造だ！新しい世界へ」『読売新聞』掲載。講書始めの控えとして宮中へ。

三月、『日本文化の問題』（岩波書店）。山本良吉と山本宅および日本放送協会にて対談し、アルミニウム・レコードに録音（当時非公表、戦後NHKが放送）。

六月、近衛文麿を訪問し第二次近衛内閣組閣の件で意見する。

八月、「実践哲学序論」（『岩波講座 倫理学』）。

十月、次男外彦帰還。

十一月、第二回文化勲章受章。

十一月、十二月、痔を病む。

十二月、「ポイエシスとブラクシス」（『思想』）。

この年、高坂正顕、京都帝国大学人文科学研究所教授となる（翌年、所長）。

●昭和十六年（一九四一年） 71歳

一月、講書始めの儀に「歴史哲学ニツイテ」と題し進講。談話「逝けるベルグソン」『朝日新聞』掲載。
四月九日、京大付属病院にて四女友子死去。
五月六日、九鬼周造を病院に見舞う。九鬼は同日深夜に死去。
五月、六月、「歴史的形成作用としての芸術的創作」(『思想』)。
七月、次男外彦、再度召集される。
九月、「国家理由の問題」(『岩波講座 倫理学』)。
十月、リューマチの大患(手足のはれ、関節痛)、病臥。
十一月、京都府立病院入院。『哲学論文集 第四』(岩波書店)。

●昭和十七年（一九四二年） 72歳

六月、門外に散歩ができるようになる。日記再開。マッサージが続く。
七月十二日、山本良吉死去。
八月、避暑のため、半月のあいだ大徳寺芳春院に移る。

●昭和十八年（一九四三年） 73歳

一月、二月、「知識の客観性について(新なる知識論の地盤)」(『思想』)。
二月、三月、国策研究会からの接触。
五月、国策研究会で話をする。国策研究会の求めに応じ「世界新秩序の原理」執筆。次男外彦除隊。
五月、六月、「自覚について(前論文の基礎付け)」(『思想』)。
九月、「伝統」(『思想』)。

この年、西谷啓治、京都帝国大学文学部教授となる(宗教学講座担当)。

年 譜

●昭和十九年（一九四四年） 74歳

一月、「物理の世界」〔『思想』〕。

二月、「国体」脱稿。

三月、「論理と数理」〔『思想』〕。文部省教学局に設置された思想審議会において、西田哲学・京都学派が国体に反するかどうかが議題となる。

五月、六月、最後となる京都生活。

六月、「予定調和を手引として宗教哲学へ」〔『思想』〕。

七月、「デカルト哲学について」、同「附録」〔『思想』〕。

九月、『哲学論文集第五』（岩波書店）。「生命」起稿。

十二月、「生命」脱稿。金子武蔵・梅子宅、空襲で全焼。「数学の哲学的基礎附け」起稿。「哲学論文集第四補遺」〔『哲学研究』〕。「国体」の改題。雑誌に印刷された発行日は九月一日。

●昭和二十年（一九四五年） 75歳

一月二十五日、「数学の哲学的基礎附け」脱稿。

二月四日、「場所的論理と宗教的世界観」起稿。

二月十四日、「長女弥生死去（胆嚢炎）」。

三月上旬、「生命（一）」〔『思想』〕。雑誌に印刷された発行日は前年十月一日。田辺元、停年退官。三

木清、警視庁に検挙される。

四月十四日、「場所的論理と宗教的世界観」一往脱稿。

五月十日、「場所的論理と宗教的世界観」を岩波書店に渡す。

五月十二日、鈴木大拙来訪（最後の訪問となる）。

五月二十六日、九鬼周造の墓碑のため、自ら訳したゲーテの詩「見はるかす山々の頂／梢には風も動かす鳥も鳴かず／ましてはしやかて汝も休はん」を揮毫。

五月三十日、絶筆となる「私の論理について」起稿。

六月一日、午前中「私の論理について」執筆。昼食後に痙攣し昏睡状態に陥る。尿毒症の診断。

六月六日、再び昏睡状態に陥る。

六月七日午前四時、死去。九日、逗子小坪火葬場にて荼毘に付される。法名、曠然院明道寸心居士。遺骨は石川県河北郡宇ノ気村長楽寺、北鎌倉東慶寺、京都市右京区花園妙心寺霊雲院に埋葬された。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

西田幾多郎の声

手紙と日記が語るその人生

前篇

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

明治二十八年（一八九五年） 25歳

● 明治二十八年九月八日 ● 山本良吉宛

手 先日来、大兄の消息いかんと待ち居りたる折から御手紙を辱^{かたじけ}うし、悦んで拝読いたしたり。無事御着京の由、芽出たく存じ候。しかし京都には流行病これあり候由なれば万事御注意あれ。学校休みの様子なれば定めてつまらぬことならん。先日はスペンサーの倫理書お送り下されありがたく存じ候。かの小包は cover もとれ非常に損し居り候が、いかがの訳にや。郵便の不都合極ると云うべし。小生も去月二十七日に帰りたり。荳圃はその後音信なきか。聞けば尚金沢に居る由なり。独峰君去月二十日頃一寸手紙をくれし故その後返事いたし置きしがそれより何の音信もなし。

大兄は諸教授を訪問し快談を試みられし由、定めて面白かりしならん。大兄、東京に止まられざりしは惜しむべし。君の如きは東京に巨臂を奮う方、大いに世の為めとなるなり。然れども今はいたし方なし。先ず暫時故都の月を眺めて時機を待たれよ。丈夫玉碎恥瓦全。進める丈は奮進すべし。有為の青年、一地方に局促すべからず。余も昨年来は唯惴々として日月を送迎せしが、今夏大兄と話をして大いに活氣を得たり。人間五十活潑々地、行かんと欲する処にゆき、進まんと欲する処に進むべし。余が昨年来の引き込み思案は大いに誤り居れり。蟄居して学問し三宅程になりたりとて一の Geis (義啓) と同じく世に益なし。己の得たる丈は世に顕わし世を進めざるべからず。これ吾人

25歳 (1895年)

の義務なり。余は自ら揣摩^{くま}らず能登^{のう}中学に終るより一層大なることに一生を奉ぜんとする。始めより小事に安んぜば一生成す所知るべきのみ。余は今夏大兄と話し居たる如く明年は東都に出で大いにドイツ文学及び哲学を勉強し、今までの仙人主義をすてて務めて世界の舞台に出んと思う。余はこれを楽しみとして勇気勃勃勉強いたし居り候。 有翼拝 蹉跎兄（…）

明治二十九年（一八九六年） 26歳

● 明治二十九年三月三十一日 ● 山本良吉（京都）宛 能登七尾発

春陽の候に候処、大兄この頃はいかが御暮し遊ばされ候や。小生この頃は転任につきてかれこれ騒しく、今月は無益に消費いたし候。小生だけは来月三日に金沢へ参る積りに御座候。一月程は先ず得田に居る積りに御座候。御手紙下され候わば備中町七十六番地得田宛にて願い上げ奉り候。藤岡兄にも左様御伝言下されたく候。先日申し上げ候通り、小生の後任には深田氏を推し同氏も来任を承諾しくれ候えども、小生当県の尋中につきては面白からぬ事のみに御座候。

分校は火打谷へ移転せぬことに相成り候えども、この頃は又県庁にて二年以下となし、今より尚教員を減ずる考えもある由、さなくば当分廢棄ならんと存じ候、これに反し本校の方は中橋徳などに煽動せられ、五千円に迷うて俄かに一年生の三百五十も募集する由、冷やかに傍視すれば狐憑者の仕業に御座候。

26歳（1896年）

先日のお手紙によれば大兄には鵬翼万里の雲を衝かんか將た peaceful life を取らんかとの御考ええこれあり候由、小生は今にして family life を後悔いたし居り候故、切に大兄もこの鬼窟に陥り給わざらんことを望む。側に大兄が京都に於ての御評判を聞くに、人皆大兄の熱心に驚き居る様子なるが大兄の狭量を誹り居る由、大丈夫もとより人言を顧みず。されども狭量は大兄の僻なれば少しく顧慮する所あれよ。

本月二十五日小生方に一女児を挙げたり。余は多く浮世の網をつづる身となれり。日々己が氣力の衰えん事を恐る。金沢へ行けば雪門禪師に参して妙話をきかんと思ふなり。今年の夏は七月早々京都より東京へ漫遊するつもりなり。その節定めて又御難題になるならん。藤岡幸二は最早当校の名籍を削りたり。幾多郎 良吉兄

● 明治二十九年六月二十九日 ● 山本良吉宛

先日は御手紙を辱^{かたじけな}うし早速御返事申し上るべき筈の処、試験等かれこれ多忙にて失礼いたし候。書籍の事につき御難題申し候が、ドイツと取組はこの方にててもでき候間、この方にていたすべく候。

先日はある処にて大菅氏に面会いたし候が、大兄は舎監となりてより非常にいそがしく、為に安眠もできざる由、学校の為にするは感ずべき事ながら、果して左様にては身体の為にあしからんと思ふがいかに候や。又御前途につき御相談これあり候が、貴考の如く今属官などになりては実につまらぬなり。小生は身を立つるは成るべく規模を大にするをよろしと存じ候。元就が、天下を志す者はよく一方に主となり一方に志す者は一国に主となると云いし如く、人は何をなすにも、玉と砕くるも瓦となりて全からずとの氣概なかるべからずと存じ候。貴兄もし洋行にてもなさんとの御志

あらば小生は至極賛成に御座候。世界に大事をなさんと欲する者は勿論我が国にても大業をなすには西洋を見ざれば不可なりと存じ候。気節なく学識もなき当今の操觚者の中に入りてもつまらぬ者ならん。大兄もと自由の身、何ぞ鵬翼を千里の外に奮い給わざるや。上田君また常に洋行を以て念となす。かれ少しくVandy (*ヴァンダイ) の傾きあるも又一快男子たるに愧じず。貴兄はいかなる方法を勉強なされ候や。小生は誠に方法に困り居るなり。どうしても古来の大学者の書を一通り読む方がよきかと思ひ、これより順序を追うて大哲学者の書をよむつもりなり。これまでよみたる者は皆々粗略にて益とならず困り候。今年の九月よりは第四ヘエーマンと云うドイツ人来るべき筈なり。独語勉強の都合はよし。二、三年中はドイツ語にて充分文章をかくことと少々Classicsも勉強して他日の用に備えんとす。

聞く所によれば今年九月より金沢に浄土宗の学校出来る様子なり。小生は勉強かたがた哲学史と哲学概論（少時間ならば）講じたく思うが、もし左様の都合にゆかずや。宝山君に御相談下さるまじくや。

貴兄は快楽を本とせずと云う。然らば何故に人類は保存を目的とせざるべからざるか。貴兄はthe very word bringがこの理を示すと云う。bringは事実なり。これより ought to be を deduce する (*推察) は困難ならん。余は保存は人類の目的と云わんよりは、保存は人類の目的を達する手段ならんと思う。かつ又単に道德の標準を「保存」の如き外界の事に取れば、道德の主要部たる意志の価値等は消失するならんと思う。しかしかの如き論は互いに精密に論じ精密に評せざれば不可なり。他日大兄精しき論文に作り給わばその時敢えて卑見を述べん。鈴木君の宗教の雑誌は宗教の外 (*ほか) のせざるや。他の知識論、哲学史の如きは入れざるか。六月二十九日夜 有翼拝 山本大兄

明治三十年（一八九七年）

27歳

目 明治三十年 日記帳余白

Non Multa sed Multum. （多説けり精読す
*広からむと深く）

非凡の人物となり非常の功を成さんとする者は、天地崩るるも動かざる程の志と勇猛壮烈鬼神もこれを避くる程の気力あるを要す。

富貴も心を蕩せず、威武も屈する能わず、正義を行うて水火もさげず。

何事も自分の考えを立て、自分これを行う。他人に依附せず。

人より勝るには人に勝りたる行なかるべからず。

大丈夫、無学無智を以て自任するの勇氣なかるべからず。

他人の書をよまんよりは自ら顧みて深く考察するを第一とす。書は必ず多を貪らず、古今に卓絶

せる大家の書を取りて縦横にこれを精読す。

第一の思想家は多く書をよまざりし人なり。

読書の法は読、考、書。

一事を考え終らざれば他事に移らず。一書を読了せざれば他書をとらず。

明治三十年一月十四日（木） Ich entschloss mich nicht lateinisch zu lernen. （ラテン語を学ぶことに決める）（…）

27歳（1897年）

- 日 明治三十年一月二十五日 (月) (...) Zum unsern Erstrauen besuchte der Vater unser Haus. (我が家へ至り我が母御大) (...)
- 日 明治三十年二月十七日 (水) (...) Wir wurden auf den Vater verdächtig. (我ら皆、父に疑惑を懐く下、至る)
- 日 明治三十年二月二十五日 (木) (...) Ich entschied mich etwas französisch zu lernen. (oh grillenhaft!!!) (ふ「何事ぞ、さうな成程はナロー」)
- 日 明治三十年四月十六日 (金) Am Abend kam der Vater, mit dem wir den Streit gehabt haben. (暮れ方、父来て、我らと口論となる) (...)
- 日 明治三十年五月九日 (日) (...) Koromi ging aus dem Hause ohne Grunde. Wir alle schlafen nicht. (母美、理由なく)。 (て失跡、皆眠らず)。
- 日 明治三十年五月十日 (月) Diesen Tag keine Nachricht von Kotomi und Töchterchen. Ich ging nicht nach Schule. (この日、父の口より、何事もなく、山田校へ出ない) (つづ)
- 日 明治三十年五月十三日 (木) Heute kam Kotomi. Der Vater wurde darüber sehr zornig. (今日、母美来り、父、激怒)
- 日 明治三十年五月十四日 (金) Der Vater wies Kotomi aus. (父、母美を逐ふ)
- 日 明治三十年五月二十四日 (月) (...) Heute kam meine Tante. Unsere Ehescheidung. (今日母山田叔母、離婚) (となる) (...)
- 日 明治三十年五月三十一日 (月) Heute Abend wurde ich abgesetzt. (今夜晚職) (...)

手 明治三十年五月三十一日 ● 山本良吉宛

拝啓 小生これまで深く気を付けざりしが、大兄の御注意の如く、本日は第四に大改革これあり、小生もまた囑託を解かれ候。第四の改革を要するは内外共に認めたる所。今、川上氏これを決行せ

27歳 (1897年)

られたるは賀すべき事に御座候。小生の如きは勿論学徳共に人の師たるに足らず。今度の事その分なりといえども、唯かの秋山、木村輩と十把一東中にされたるはあまり面目にも御座なく候。小生はこれを機として今一度書生となり東京に勉強せんかとも思ひ候えども係累もこれあり候事故、ちと困り候。しかし尋中へ行くことは好まず、なるべくは独語か又は哲学の教師致したしと存じ候。貴兄も何か御考えあらば御申し越し下されたく候。小生未だ他にいかなる人々止められたるかを知らず。然れども秋山、木村、得能の止められたることは確かなるべく、ドイツの方の後任には例の向と山口の草鹿と来る由なれば、向は余の後任にして草鹿は上田の後任なるべし。然れば徳永氏等万歳と祝すべきか。余は後便にゆずる。 幾多郎 良吉君

日 明治三十年六月十七日 (木) Heute Morgen habe ich das Haus zu Kanazawa verlassen. Ich habe mich zu Fukui beherbergt. (今朝金沢の家を出る 福井に止宿)

日 明治三十年六月十八日 (金) Heute Abend bin ich mit Eisenbahn an Kyoto angekommen und mich bei Hrn. Fujioka niedergelassen. (今晚京車にて京都着 藤岡氏方に落ち着く)

日 明治三十年八月二十一日 (土) Heute Nachmittags bin ich an das Haus angekommen. (午後)

日 明治三十年八月二十四日 (火) Heute kam Kotomi wieder in mein Haus. (今日友来再び 我が家に来る)

日 明治三十年八月二十八日 (土) Heute wurde meine Sache mit Yamaguchi zu Stand gekommen. (山口の件、成る)

日 明治三十年九月七日 (火) Um Mittag bin ich an Yamaguchi gekommen und habe Hrn Hojo sofort besucht. Ich habe bei Takataya eingekehrt. (正午山口着 直ちに北条 先生を訪問 高田屋に宿)

日 明治三十年十月三十一日（日） 語学は勉強さるべからずといえども、如何にしても外人に及ばず。大概にして可なり。それより文章を作り自分の考えを養うべし。

飲食はこの体を養う所以、決して快を貪る者にあらず。

他人は用のなきときに訪問すべからず。贅談は時を浪費し又己が徳を汚す。敵に戒むべし、戒むべし。

日 明治三十年十一月二日（火）（…）菓子を食べすぎたり、菓子はこれより断然癢すべし。

日 明治三十年十一月五日（金）（…）三食の外、物を食うべからず。

手 明治三十年十一月十一日 ●山本良吉宛

拝啓 その後はいかがが御消光遊ばされ候や。御病氣この頃はいかがに御座候や。先日は端書にて御一身のことを申し上げ、もし他に独語を解する人もあらばと後より気付き、後悔いたし候。御海容下されたく候。さて御病氣、實際いかがに候や。もとよりこの身の健康も大切なれども、人間の欲は誠に鉄面なる者にて、一たびこれを充たせば又その上を望む。その頭をあげ来るや、誠にハイドラの頭の如し。如かず、その根本より断滅するの愉快なるには。人間はそれよりそれと心にかければ繁忙又繁忙、寸刻も安き能わず。君、深くその心の奥に返りて妄念の本を斬らずんば到る処に不満は君を苦しむならん。余も始めて当地に参り候時は、誠にいづれを見ても不快なりしが、その後独りにてよくよく考え、今では何となく心安らかに相成り申し候。いろいろ不満に思ひし事も、顧れば己が心のいやしきを恥ずかしく存じ候。マタイ伝の六章に Which of you by taking thought can add one cubit unto his stature?（汝らのうち誰か思ひ煩いて、身の丈、尺を加え得んや）の語を深く感じ候が、この語を守れば別に不平の起る筈

27歳（1897年）

もこれあるまじくと存じ候。

この肉身も大切なべけれども、人は無理にこの肉体を保たざるべからざるの理ありや。思うに人の生命は肉身にあらず、その人の理想にあるならん。人がその内心に深く探りて善と思う事に反する事をなすの時は、即ち己が他に庄せられ、己たる者はすでに死亡したる也。徳富は肉体は存するも確かに棺木裏の中に入りたる也。人が深く深く心の奥を探りて真正の己を得てこれと一となるの時あらば、たといその時間一分時なりも、その生命は永久ならん。何ぞ己が精神を苦しめてこの醜肉体を保つの要あらんや。君は何の故にこの肉体の生存を欲し玉うや。一毫も精神上の己に背いてこの肉の永存を計らば、たとい肉体は存するも精神は死去し終らんか。

今余が肉体上死するとすれば第一に余が念頭に浮ぶことは父母妻子のことならん。余は誠にこの間に洒々落々たる能わざるなり。唯、近頃マタイ伝第六章の、神は時かず収めず蓄えざる鳥もこれを養うとききて、少しく心を安んじうるなり。君も御存知の如く、バイブルは実に吾人が心を慰むるものなり。余はどうしても論語の上にあると思うが貴説いかが。先日鈴木兄の手紙を見たり。男女交際の論はもとより余輩が年来の考えと一致せり。唯、大拙の口よりこの事をきくは大いにこの事を真理とするの価あらん。幾多郎 良吉君

日 明治三十年 日記帳余白

猥りに人言を信ぜず。

熟考せざる事は云わず。

人と冗談して貴重之光陰を浪費せず。

人の悪言せず。

正しくて成さざるべからざる事は他事を顧みずしてその日に直ちにこれをなす。
一日のなすべき事はその日の朝これを定め、必ずこれを断行す。

明治三十一年（二八九八年） 28歳

日 明治三十一年一月三日（月） 八時晨起。午前天授にて文器禪士と語る。器曰く、十六年なお悟

入し得ざりし者あり。余竦然毛髪を立つ。余もまた之の徒たるなきを得んや。すでにして以為らく、好し一生悟入し得ざるも致し方なし。左程の鈍物なれば他の事をなして同し事なればなり。霊運和尚も二十年終に悟り得ずと宝山君話しき。午後宝山君を訪う。夜は打坐。

日 明治三十一年九月二十一日（水）菓子を禁ず。着実なれ。謹んで （結） なるなかれ。

日 明治三十一年 日記帳余白

古来天性英邁の人も幾多の辛酸を経て始めて大道を成す。余輩謝劣なる者、豈等閑の思いをなすべけんや。

光陰一過再来せず。須く念々刻々大憤志を起し妄念を去り、大道に徹せんことを務むべし。大道は処によらず唯志による。

人は馬鹿正直にあらざれば道を成す能わず。

29歳（1899年）／28歳（1898年）

志を大にして小利小成を願うべからず。大器晩成。

私心を去れ。人に悪をかくすなかれ。良心に少しにても違うことはなすなかれ。

工夫は念々着実にし、等閑にすることなかれ。一寸の光陰も重んずべし。

東嶺和尚曰坐時々々参 行時々々参 臥時々々参 食時々々参 語時々々参 一切作務
時々々々々々参。

安逸は恐るべき讐敵なり。人は時々刻々白刃頭上にかかる心持にて居るべし。

桃陽生

明治三十二年（一八九九年） 29歳

● 明治三十二年一月十九日（木）母ヨリかなしき手紙来ル。

● 明治三十二年一月二十七日（金）母より慈悲の手紙来る。

● 明治三十二年二月四日（土） Briefe für Mutter u. Tokuda, dadurch ich mich mit der Frau versöhnte.

● （母と得田（母）
（これを以て、妾と和解す）

● 明治三十二年二月二十三日（木）雨。曉起打坐。学問をせねばならぬと云う念に妨げらるる事多し。徳山の事を思うて戒むべし。夕頃には志挫折し甚だ不快なりしが、たちまち氣を取直し坐せり。されどもどうもあれを読むべきや、これをいかにすべきなどの無益の雑念多し。読書は多端ならず、心に要する問題を求めて研究するにて足れり。

● 明治三十二年二月二十四日（金） 暁坐。やはり書をよむに、いや古の者ばかりにてもいかぬとかなにとか云う念やまず。

● 明治三十二年三月二日（木） タベに保険金を持ちゆきて感ず。僅かに二、三百円の金を蓄うにもかく厳肅にせねばならず、^い沉んや生死を脱する大事をや。

● 明治三十二年三月七日（火） 東圃より手紙、頗る^{すこぶ}失望す。到底京都の事はだめならんか。

● 明治三十二年三月八日（水） 藤岡と北条とへ手紙を出す。午後晴天により山に行き坐す。夜も打坐。午後は多分打坐に用ゆ。一時失望したれども志を大きくして困難中に成就せんと勇氣を生ず。

● 明治三十二年三月九日（木） 三竹君より手紙来る。午後学校にて行軍の相談の時、ちと憍慢心を生ぜり。夜打坐、京都一件全く心を離れ心甚だ快なり。可なり機立ちたる方なりき。されども慢心起り深からず。

● 明治三十二年三月十日（金） （ ） 心きたなくも物を食いたり。これはちとつつしむべし。

● 昭和三十二年四月 日記帳余白

一、志操高邁、胸襟磊落、些事に心を勞するなかれ。

一、念々着実、苟且^{かま}にも浮薄の念あるべからず。

一、無字の公案、寸時も打失すべからず。

一、世事は凡て天然に任せ、卑劣の念を起すべからず。

夜十時朝五時 朝二時夜一時（打坐） 読書三時。

土、日の外、人を訪わず。三食の外、物を食わず。

29歳（1899年）

飢飽、寒暖、榮辱、得失、凡て天に任す。
道の為めにする者は喪身失命を厭わず。
一心不生万法無咎。

日 明治三十二年五月

朝夕の打坐怠るべからず。

用なきに人を訪うべからず。

無益の者、食うべからず。

乱読すべからず。

日 明治三十二年八月六日（日） 日々蠢々懺悔々々。不求利。不求名。不求学。不求口耳之欲。只

道之勉。

日 明治三十二年八月八日（火） この日より大摂心始まる。願心不退。信心不壞。

手 明治三十二年九月十五日 山本良吉（静岡）宛 金沢発

御手紙拝誦仕り候。道学のこと絶えず御心懸けの由、賀し奉り候。小生なども日々念頭にかけて居り、今度も妙心寺にて一夏研究いたし候えども、小生が欠点は勇猛決烈の精神に乏しく、一生懸命の場合に臨んで退く故、何の功もなく慙愧の至りに御座候。貴命の如くこの事は一通り心懸け居り候ても、余輩の如き、外に職掌あり内に妻子の纏綿あるものは中々に困難のことに候。されども小生の聞く所を以てすれば、日々一時間にてても三十分にてても満身の熱誠を以て提撕し、その他、閑時には忘れぬ様につづけ居れば漸々に熟するものの由にて、唯一日にてても中止するのが最も悪しき由

に御座候。小生もはや二、三年も空しく費して人にも愧^{はづか}しきことに候が、これも自身に臭気多きが為なれば致し方なし。幸に今度よりは臥竜山に雪門老師のあるあれば、少し物事うちつきなば一ツ奮うて参して見んと存じ居り候。いかなる貴き事、この心の救いより大切な事あらじとは、小生近來ますます感ずる所に候えば、ヨシ幾年無益に星霜を送るとも、この事だけは遂げたき念願に御座候。大兄も真実にこの心の救いを求めんと欲し玉わば、来年の暑中の休みにても好機会あらば閉居して一奮発ありてはいかん。

幸いに峨山和尚の如き英物あり、一夏参して見ては如何。古人も道を求むる者は放身捨命を厭わずと。すでにこの身を知らず、何んぞ妻子や妨害やあらん。キリストも余は平和の為に來たらず、親と子と戦わせ云々とか云う語ありたる様に覺ゆ。これ余輩中々及ぶ所にあらず。また口にすべき所にあらずといえども、道の為にする者は這般の心懸けなかるべからざるべきか。何事も涙なり、中々一通りにてはいかぬ様なり（今に及んで大拙兄当時の心中思いやらるるなり）。（…）

幾多郎 良吉君

明治三十四年（一九〇一年）

31歳

日 明治三十四年一月四日（金） 雨。午前坐禪。午後少し眠りて後坐禪。夜坐禪、十一時半まで。
鉄舟の詩 独露巍々宇宙間 尽扶桑国別無山